

菅野正彦先生を送る

コミュニティ政策学部教授

明瀬 政治

菅野先生は、本学部開設 2 年目（平成 11 年）に愛知教育大学から赴任されました。先生のご専門は英語学、中世英語英文学であります。とりわけ、チョーサー（Geoffrey Chaucer）、ガワー（John Gower）の研究者として活動してこられました。

先生の研究暦はほぼ半世紀の長きに及ぶと同時に、群を抜いた研究業績には誰もが驚きを禁じ得ません。専門外の私に研究業績の質の高さを紹介する能力はもとよりありませんので、ここでは、私にとっての先生の存在の大きさをお話したいと思います。

まずは、教授会での出来事です。先生は両手を前に組んで背筋を伸ばし、めがねの奥の大きな目を半眼に、頬に柔らかな微笑を湛え、いつも議長席の対極に鎮座されました。はたして議論の流れを聞いておられるのかと疑いたくなるほどの静かな面持ち。草創期の教授会は、コミュニティ政策という新しい学部の運営方針をめぐって、時には侃々諤々、殺気立たんばかりに紛糾しました。やがて議論が膠着し、会議室に重い空気が漂い始めたころ、「はい」の声とともに先生の挙手。その手が議長の、そして教授会全メンバーの視線を捉えると、凍りついた空気が一変し、氷解するのです。先生の発言をもって多くの議論は決着をみました。そしてその発言はいずれに与するものではないものでした。不思議な能力というほかありません。

菅野先生の日常生活はそれ自体、研究生活です。講義の時間を除けば、常に研究室の机に向っておられる。ご出校はおそらく年間 300 日以上でしょう。土曜も日曜もなく、学会でもなければいつも研究室に明かりが灯っています。その菅野研究室は私にとってオアシスです。ご迷惑もかえりみず、毎日、先生の研究室を訪ねることにしています。先生の机の上に広げられた資料を覗き込み、これはどう発音するのですかなどと、ただただしくローマ字読みすると、嫌な顔をされることなく、正確な発音と同時に、格変化など、ミニ講義がいただけるのです。現代英語はもとより、中期英語、ドイツ語、フランス語、ラテン語などなど、ヨーロッパ語を勉強された先生の博覧強記には驚く他ありません。浅学の私には到底理解できるものではありませんが、それは私にとって至福の時なのです。

しかしこのオアシスは、単に心地よいだけの空間ではありません。菅野先生の研究室は年間に数冊ペースで研究書を生み出す製造工場でもあるのです。「明瀬さん、本を書きなさい。学者の仕事は文字にして残すことだ」と、寡作の私には相当のプレッシャーであると同時に、基本に帰り、明日への指針を再確認するオアシスでもあります。先生は

無言のうちに後進のあるべき姿を諭されるのです。

だが、上記の話は午後5時までのことです。菅野先生を「お酒」を措いて語ることは出来ません。教壇に立った方ならどなたも経験することだが、不勉強な学生たちから受けるストレスはただ事ではないのです。菅野先生の凄さは、この悪童どもの発する害毒を一夜にして解毒し、翌日にはすべての学生を「善良なる童」として受け入れ、神のご慈悲を施されることです。おそらく酒神バックスと契約されておられるのでしょう。先生ご自身の辨によれば「家一軒飲んだ」とのこと。過言どころか、それでは足りないでしょう。菅野先生を横綱に、大勢の酒豪どもが集い、無類の喜びをおぼえたことは間違いありません。もちろん、私も菅野一門の末席に加えていただいたことに感謝しています。

菅野先生の肝臓はおそらくステンレス製です。先生の「ここ30年間、風邪を引いたことがない」の言葉は、研究者に必要なのは健全な精神であり、その礎が強健な肉体にあることを教えてください。そして、その強健な肉体を授けてくれたご両親、とりわけ母親に対する感謝の念が込められていることを知らされます。

過日、菅野先生のお宅を訪問した際、書棚に次の句が掛けられていました。

春の道 歩み続けて五十年

この句は菅野先生ご自身の作です。

先生は、学部創設時に学生に配布した教員紹介に、ご自身の学生時代を次のように語っておられます。「私が大学に入学したのは1954年で、...特に食糧事情が悪く、学生は空腹に耐えて勉強していました。お陰でよく勉強が出来たので、今では空腹に感謝しています」そして、新入生への一言に「(大学は)自由に満ち溢れています。しかし、急に大きな自由を手に入れると、ルソーの言葉のように『虚弱で、きゃしゃな体質を圧倒し、破壊し、酔わせる』危険もあります。どうか、一步一步、高い山に登ってください」とあります。

これは私自身に贈られた言葉として受け止めたいと思います。菅野先生ありがとう。